

創刊の辞

佐藤弘夫

日本学研究会の発足に伴い昨年2月に第1回学術大会が開催され、100名を超える参加者をえて盛会のうちに終了することができた。この3月には第2回の大会が開かれ、日本学研究会はアカデミズムの大海のなかに順調に船出することができた。さらに、多くの方々のご尽力によってこのたび『学際日本研究』第1号が刊行されるに至ったことを、会員の皆様とともに心から喜びあいたいと思う。

日本学研究会は、専門分野・所属大学・国境を超えて、学問の世界に新風を吹き込むことを志す若手研究者たちによって立ち上げられたものである。わたしはその高い視線と旺盛な野心に心動かされ、初代の会長をお引き受けすることにした。

学問の世界では、いま「日本学」がブームになっている。この名を冠した新組織や研究会が次々と誕生している。その背景はさまざま考えられるが、既存の学術分野の枠内での研究に若干の窮屈さと息苦しさを感じている人々が増えていて、それにとらわれないスタイルの学問研究を追求しようという風潮が生まれていることは否定できない。研究の国際交流が進み、海外からこれまでなかったようなタイプの日本研究が次々と紹介されていることも、原因に加えていいだろう。

本研究会は、日本列島で生まれ育まれた思想・宗教・文学・歴史・民俗などの諸現象を、広く研究対象とするものである。学問的であることだけが唯一の条件であり、その内容や方法には一切制約や注文はない。専門分野と研究方法を異にする人々がこの研究会に集い、国籍・人種・性別に関わりなく、自由で闊達な議論が展開することを期待している。

今日、日々生み出される日本学に関わる研究業績の多くは、前提となるその分野固有の知識を欠いては理解できないものが多い。容易に専門外の人間の容喙を許さないそのしきたりは、学問の厳密さと裏腹の現象であり、わたし自身はあながち否定すべきではないと考えている。

ただし、緻密で実証的な研究であるうちはそれでいいが、専門分野を異にする人々が集いあって議論を進めるためには、自分たちの研究成果を、より多くの研究者と共有できる形にしていくための不断の努力が必要である。言葉を換えていえば、それぞれの成果をより汎用性の高いフォーマットに変換していくこ

とが求められている。その努力と練磨のなかから斬新な発想が生まれ、やがては日本研究のパラダイムの転換へとつながっていくに違いない。

いまの人文学において世界中で通用している学問の方法は、ほとんどが欧米から生まれている。

中東やアジア出身の研究者がだいたい活躍するようになったが、発信の中心地が欧米であることに変わりはない。わたしたちはそこで作られるルールに則ってプレイしている、まだそういう状況にある。この研究会から、国際的なレベルで学問のルール作りそのものに携わることのできるような、スケールの大きな研究者が輩出することを期待している。

かつて世界が近代といわれる時代に突入したとき、人々は人間の理性の限らない進化の先に、この世にユートピアが実現することを夢みた。しかし、いま近代の成熟の果てにわたしたちが目にしてしているものは、深刻な環境汚染であり、人類を幾度も滅亡に至らしめるに足る大量の核兵器であり、3・11の震災で廃墟となった原子力発電所の残骸である。科学技術の進歩に向けられた疑念は、わたしたちが抱いていた人間観にも大きく影を落とした。文明化に伴う理性の進化に対する期待と信頼が、過激で独善的な差別主義とナショナリズムの勃興という現実の前に挫折を強いられていくのである。

環境問題にせよ原発問題にせよ、またナショナリズムの問題にせよ、今日わたしたちが直面している社会的課題の困難さは、それが文明の未発達から生じるのではなく、文明の成熟にともなって浮上した点にある。近代化の進展によってすべての問題が解決するというストーリーが描けないところに、この問題の深刻さがある。

これらの問題が文明化の深まりの中で肥大化したものであるとすれば、その病状診断を行って対応策を考えようとする場合、近代という枠組みのなかでそれを行うには限界がある。むしろ近代を超える長い射程のなかで、こうした問題を生み出す近代という時代の異形性を浮かび上がらせるという方法が求められている。いま必要なのは近代そのものを相対化しうるような視座の確立である。百年単位、千年単位で人類の智慧を蓄積してきた人文科学が、この問題に対して発言する資格を有するとすれば、その根拠はまさにその点にある。

直接論文上で言及することはないにしても、わたしたちの置かれた現状に対する深い洞察は、必ずやその研究に容易に底をうかがわせない奥深さをもたらすにちがいない。多様な問題意識に裏打ちされた力作を、本誌において目にすることを楽しみにしている。